

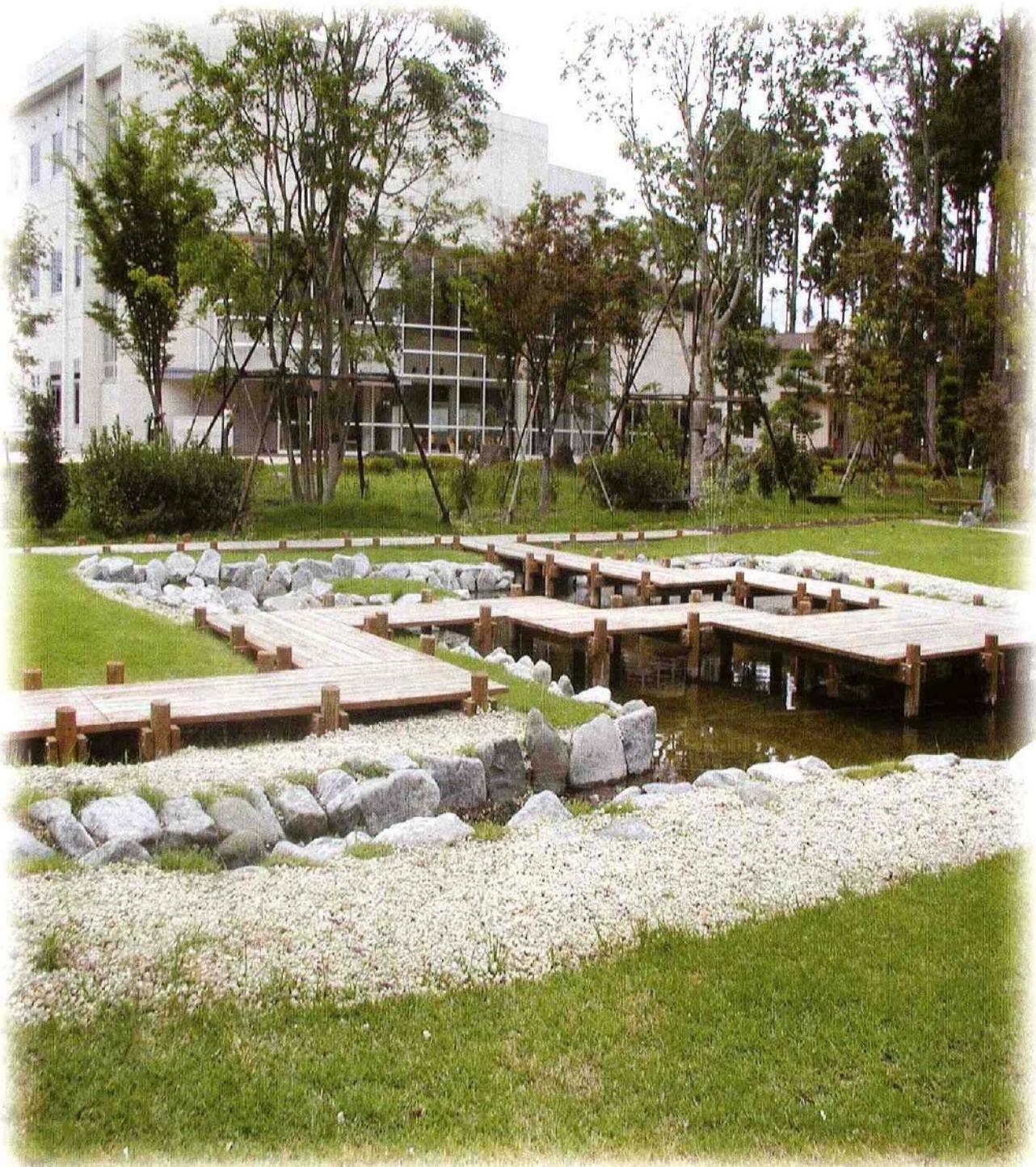
## INDEX

ごあいさつ	2
平成16年度第47回通常総会報告	3
「母校を訪ねる会」第24回目を開催	4
クラブ・OB・OG会報告	12
支部活動	13
校友レポート	16
CAMPUS NEWS	18
がんばり記	20
創設60周年記念事業資金の募集について	21
校友短信	22
キャンスマップ	23
通常総会・母校を訪ねる会の案内	24

# 日本大学工学部 校友会報

第68号

平成17年3月1日



心 静 緑 感 広 場

(第20回都市公園コンクール国土交通大臣賞受賞)

## ごあいさつ



日本大学工学部長  
**小野沢 元久**

平成17年の早春を迎え、校友各位の皆様には益々ご健のこととお喜び申し上げ、平素の温かいご支援に対しましては、心より深く感謝いたします。

昨年は、台風による水害や中越地震を代表とした天災の多い1年でありました。被災された校友の皆様には、紙面をお借りいたしましてお見舞い申し上げます。

さて、昨年から今年の年始にかけて世界各地で異常気象や地震等の災害の報道が各メディアを通して配信され、環境問題も大きく取り上げられています。

工学部では、平成14年に設置された「環境保全・共生共同研究センター」の研究者を中心としてこれら環境問題の解決に向けて研究を行っているところであります。その一環としてISO14001を取得し、学生・教職員に対し教育・訓練を行うことにより、環境問題に関心を持ち解決できる技術者を養成したいと考えております。

この度、雨水ろ過長期保水システムを備えた学内の「心静緑感広場」が高い評価を受け、第二十回都市公園コンクールで国土交通大臣賞を受賞いたしました。これは、「心静緑感広場」の地下に、大量の雨水を貯める水槽を設置し、水を循環させて雨水再生水を半永久的に貯めるシステムであり、

循環に必要な動力は太陽光や風力発電のエネルギーを利用することにより稼働させています。このシステムの活用は今後、広範囲に注目を集めることでしょう。

また、これからの中大は「十八歳教育」に加えて、社会人リフレッシュ教育や生涯学習分野にも力を注いでいかなければなりません。地域に開かれた大学の存在意義を確固たるものにするため、教育機能のインフラ整備として、最新の情報関連施設と雨水ろ過長期システムを取り入れた地下一階地上九階建ての新教室棟を平成18年4月供用開始に向け建設中であります。この建物には、全教室に高速LANを配備して、文部科学省の補助事業で取り組んでいる「サイバーキャンパス構想」の実現を目指し、これからの中大の有りかたを見据えた取り組みをさらに進めてまいります。

さらに、文部科学省の補助事業の支援を受けた『次世代工学技術研究センター』、『環境保全・共生共同研究センター』の二つの研究センターを核とした研究支援体制の中、研究・開発が注目され、医療分野での画期的な製品開発や各工学分野の融合の中から自然環境の負荷に対する低減の研究・開発など、これからの中大社会に還元できる研究・開発を行っております。

今後とも、校友会による支援は、校友会の皆様のご理解とご協力が是非とも必要であり、大学を支える大切な柱として期待しております。中でも奨学助成金は学生にとって大変心強い支援となっております。

最後に校友会の益々の発展と、校友各位の皆様のご健勝を祈念し、ご挨拶といたします。

## ごあいさつ



校友会会长  
**加藤木 研**

日本大学工学部校友の皆様には、平成十七年の新年を迎へ、益々御健勝のことと存じます。昨年の事を振り返って見ますと、色々な自然災害が多数起った年でした。過去最多の台風上陸に始まり、獣(熊や猿の被害)の被害、それに中越地震、最後にインドネシアスマトラ地震による大津波の被害と、目をおおう様な惨状でした。その為か昨年の漢字は「災」という字が選ばれました。しかし日本には「災転じて福となす」という諺があります。本年は是非この様な年にしたいと思います。又一方ではアテネ五輪でのメダルラッシュ等うれしいニュースも報じられました。

又日本の経済を振り返りますれば日本の景気は上昇したでしょうか?疑問が残ります。新聞報道等を見れば給料が下がったの、ボーナスがカットされた等の暗いニュースもありましたが、一

方では景気は下げ止まりとのニュースもありました。出来る事なら本年はその様な暗い話ではなく景気の上向いた、充実した社会であって欲しいと念じております。

校友会におきましても本年度からは、以前にもまして堅実な財政運営を構築してまいります。ご承知のとおり校友会費の納入方法が変わり本年で3年目となりました。すなわち旧来ない、在学中の各学年次について一萬円の会費を納入する、画期的な制度が採用されたのであります。したがって、在來の校友会活動に加えて在校生諸君に対してどの様なサービスが提供出来るかを考えなくてはなりません。出来るだけの事をしたいと考えております。

また、母校工学部では創部六十周年を記念して教室棟の建設が進行中であります。これは、在校生諸君により良い教育環境を提供して、将来を背負う優れたエンジニアとして勇飛されることを願っての大計画であります。趣旨ご理解賜り校友諸氏の母校への思いを具象する証として応分のご寄進を戴きたく、心よりお願い申し上げる次第であります。

最後になりましたが、本年も校友の皆様にとって良い年であります様に、御祈念致しまして挨拶といたします。

# 平成16年度 第47回通常総会報告

平成16年5月8日(土)、午後2時より、日本大学会館において第47回通常総会が開催された。

加藤本会長の開会の辞に始まり、議長に小山田克己氏(土5回卒)、議事録署名人に石井和樹氏(土13回卒)および金澤昭治氏(土20回卒)、書記に田中敏夫氏(建19回卒)および水上 崇氏(建22回卒)が選出されて議事に入った。

村田総務委員長から報告第1号・平成15年度会務報告、伊藤財務委員長から承認第1号・平成15年度一般会計収支決算について報告があり、収支決算に対して渡邊信一会計監査(土21回卒)から適正な処理がなされている旨の監査報告がなされた。次いで両委員長より平成16年度の事業計画および一般会計収支予算が提案され、各自に質疑討論の後、賛成多数で案件が承認された。

次いでその他の事項として早川一胤氏(土14回卒)から最近の新卒者の就職状況ならびに就職先についての質問と、それらに対する会としての今後の一層の協力・支援が要望された。

総会終了後、恒例の懇親会が依田満夫工学部長代理および森田賢治本部理事長を始めとし、本部関係者、各学部校友会長のご臨席を賜り、盛大に懇親会が開催された。



## 平成15年度一般会計収支決算書

単位:円 △…減

歳入	種目	予算額	決算額	比較増減	付記
会費	1 終身会費	8,150,000	8,360,000	210,000	
	2 入会金	8,334,000	9,254,000	920,000	
	計	16,484,000	17,614,000	1,130,000	
譲り金	3 前年度譲り金	3,085,285	3,085,285	0	
	計	3,085,285	3,085,285	0	
譲り金	4 特別会計より譲り金	1,147,138	1,147,138	0	
	計	1,147,138	1,147,138	0	
借入金	5 校友会本部より借入金	3,500,000	3,500,000	0	
	計	3,500,000	3,500,000	0	
6 預金 利子		10,000	3,880	△6,120	
7 名簿代金		30,000	54,000	24,000	
8 箱収入		193,577	395,600	202,023	
	計	233,577	453,480	219,903	
合計		24,450,000	25,799,903	1,349,903	

歳出	種目	予算額	決算額	比較増減	付記
事務費	1 給料手当	2,500,000	3,676,794	1,176,794	5・8・9・28日間
	2 保険料	300,000	310,012	10,012	4より適用
	3 交通費	850,000	860,500	10,500	28日間
	4 旅費	20,000	0	△20,000	2より適用
	5 交際費	900,000	760,000	△140,000	1・6～適用
	6 開用費	200,000	241,116	41,116	5より適用
	7 印刷品費	160,000	1,597,711	1,497,711	14・15・28日間
	8 印刷製本費	300,000	97,650	△202,350	1～適用
	9 通信運搬費	500,000	296,793	△203,207	1～適用
	10 修繕維持費	10,000	0	△10,000	
	11 分担金	670,000	670,000	0	
	12 植物費	50,000	41,900	△8,100	
	計	6,400,000	8,552,476	2,152,476	
事業費	13 組織対策費	1,700,000	1,634,740	△65,260	
	14 会報発行費	6,000,000	5,027,342	△972,658	17～適用
	15 会員管理費	2,000,000	1,247,179	△752,821	7・17～適用
	16 下宿対策費	0	0	0	
	17 式典費	3,000,000	3,605,046	606,046	13・14・29日間
	18 学校訪問費	600,000	455,629	△144,371	17～適用
	19 負担補助援助費	0	0	0	
	20 新規事業費	200,000	100,000	△100,000	17～適用
	21 電算化事業費	200,000	87,847	△112,153	17～適用
	計	13,700,000	12,158,783	△1,541,217	
会議費	22 総会費	700,000	518,115	△181,885	24～適用
	23 役員会費	300,000	286,835	△33,165	
	24 連絡協議会費	350,000	414,529	64,529	22より適用
	25 旅費	2,000,000	1,980,830	△19,170	
	計	3,350,000	3,180,309	△169,691	
譲り金	26 特別会計より譲り金	0	0	0	
	計	0	0	0	
積立金	27 積立金	0	0	0	
	計	0	0	0	
予備費	28 予備費	1,000,000	0	△1,000,000	1・3・7～適用
	計	1,000,000	0	△1,000,000	
合計		24,450,000	23,891,568	△558,432	

歳入額 25,799,903円

歳出額 23,891,568円

差引残高 1,908,335円を翌年度へ繰り越しとする。



## 「母校を訪ねる会」第24回目を開催

平成16年10月24日(日)第24回『母校を訪ねる会』が創立50周年記念館(愛称:ハットNE)で盛大に開催されました。台風が多い年で当日の天候も心配されましたが、校友の皆様の祈りが届いたのか秋晴れの一日となりました。

この会は卒業生の皆様に、卒業後の工学部の変貌と現状をご覧いただき、尚一層の母校との絆を深めていただく主旨から、工学部と校友会共催のもとに開催が企画されたものです。第1回が昭和56年11月3日に行われました。その後、毎年、間断なく開催されております。

今回のご招待・出席者は、第2回(昭和28年度卒生)・7名、第12回(同38年度卒生)・64名、第22回(同48年度卒生)・61名、第32回(同58年度卒生)・32名、その他・2名の合計166名の皆様でした。しかし、残念なことに前日の新潟県中越地震発生のため、交通機関が運休したり、援助活動に従事せざるを得ない理由から、やむなく欠席される方が多くおられ、ただただ胸が痛む想いでした。

当日は、前夜に同級会を開催したクラスが多かったためか、久しぶりの友人とと共に来校され、談笑しながら思い出の残る学内や

北桜祭を見学される方が多く見受けられました。懇親会は、出席の受付を済ませて本館前中庭で記念の集合写真を撮影した後に、50周年記念館(愛称:ハットNE)で始まりました。小野沢学部長や加藤木校友会長の挨拶で始まり、料理と美酒の中で、会は和やかに進行してきました。懇親の中では、校友代表の数名から、卒業後の実体験と現状などを交えた貴重なお話しをしていただきました。また、工学部に誕生して結成間もない、應援團チアリーダー部による『チアリーダー』の披露もありました。会も竹縄となり、母校と校友の更なる発展を願って、昨年度、再結成された應援團のチアリーダーのもとに、校歌を高らかに齊唱して懇親会は終了しました。

出席者の皆様には、前日は旧友と今日は恩師・先輩・同窓の方々と旧交を温め、心ゆくまで語り合うことができたと思います。そして、いつの日かの再会を約束して散会となりました。

次回は、平成17年10月23日(日)に第25回『母校を訪ねる会』が開催予定です。対象の卒年生にかかわらず多数の方々の参加をお待ち申し上げております。



第24回 母校を訪ねる会（第2回・昭和28年度卒、第32回・昭和58年度卒） 平成16年10月24日



第24回 母校を訪ねる会（第12回・昭和38年度卒） 平成16年10月24日



第24回 母校を訪ねる会（第22回・昭和48年度卒） 平成16年10月24日

## 工学部の歴史「母校を訪ねる会」

菅野 宗和（機械2回卒）



第2回卒業生・吉田銅像の前にて



第12回卒業生と共に

今回、工学部校友会より第2回卒業生として工学部に招待されると同時に、工学部教員として卒業生との交流を果すべく「母校を訪ねる会」に出席した。

当日は日本晴れで、キャンパスの樹々は紅葉に染まり気持の良い一日であった。工学部の歴史の中で第2回生は最少の人数である。この度、集った同期生も僅か7名であった。お互いに戦中、戦後の大混乱の時代を生き抜いてきた仲間である。古希を過ぎての再会は、交わす言葉は少なくとも、酒を酌み交し、お互いの健康を確認するだけで幸せであった。（写真参照）

第12回生にも逢った。皆んな還暦も過ぎほとんどの人は会社を退職している。はじめは挨拶されても誰だったか想い出せなかったが、話をしている内に急速に昔に戻った。木造校舎での演習や実験。新潟沖地震の事。松島の造船所見学旅行。安達太良山の登山等々。話題は果てることが無かった。皆んな遠くからよく集ってくれ嬉しかった。（写真参照）

この企画は、校友故高野操助教授の発案で、私も当時色々と相談を受けた事があった。今日、校友と工学

部を結ぶ太い糸となっているのを見て、改めて高野先生の先見の明に敬意を表すと共に、この会が末永く続くことを心から願っている。（非常勤講師・元校友会副会長）

## 母校を訪ねて

後藤 尚（工化2回卒）

秋晴れの54回北桜祭に卒業して50年目の母校を訪ねる会に出席して、同期生と再会できた。2回生は半世紀前に付属高校の一回生との合同の卒業式で、全学科で43名が卒業した。再会できたのは、7名であった。高齢者の一員の身だが、若々しく元気で、50年前に戻って、永盛駅からの通学では、仮橋の貸取橋を渡ったが、洪水で渡れないと御代田橋の迂回であった。そんな時、裸で川渡りをしたことや学んだ兵舎の校舎はどこにあったか、会場のハットNEは、当どうだったか、実験では装置などなく、セメントの分析位で、それも蒸留水が不足で苦労したことなど半世紀前に戻った一時でもあった。同期生の情報交換などで益を交わすことができた。こんどは、温泉でゆっくり語らうと再会を願った。

会では、応援団の女子学生のチアリーダーのみごとの披露があり、新時代を歩んでいる姿を見ることができ、卒業して社会で活躍し一つの時代を築いた成果なのか、とも感じた。学部長先生から今後の大学の厳しさと、それに取り組んでいる学部の挨拶があり、力強く感じ、母校の更なる進展を祈願している。会を開催された方々にお礼申し上げます。

## 「母校を訪ねる会」に参加して

小池 辰安（土木12回卒）



さる十月二十四日、「母校を訪ねる会」に参加させ

ていただきました。私にとりましては、二回目の訪問でした。我々が学んだのは、昭和三十五年からの四年間でした。安積永盛駅におり立ち、阿武隈川に架かる木橋を渡り、まだ芽ぶかないアカシアの林を通り過ぎ、徳定の下宿に着いた時の心ぼそかった時の事、そして兵舎を改造した教室で学んだ四年間の学生時代が思い出されました。雨降りの道や霜がとけた道で自転車に乗り横転しながら学校へ通った事などは、今の学生諸君には、想像も出来ない四年間が、なつかしく思い出されます。

人には、故郷の山川の思い出が、いつになんでも忘れ難く心にのこり、寄り所となっているように、徳定の大自然の中で、そして足をのばすと磐梯山系の峰々、吾妻連峰の山々に思いをはせ、精一杯の若さをぶつけて、心ゆくまで、足腰をのばすことが出来た四年間は、振りかえると四十年間の社会人として、心のより所となってくれました。第二のすばらしい故郷を持つことが出来ました。立派になった母校を散策しながら、思い出をかさねあわせ、立ちさり難いなつかしさが、こみ上げて来ました。

木村先生にもお会い出来ました。そして、四十年以来の土木十二回卒の皆様方とも懇親を深めた一夜も過す事が出来ました。校友会の方々の御尽力のたまものと感謝致します。日本大学工学部のさらなる発展をお祈りいたします。

## 「母校を訪ねる会」に参加して

神野 寛 (建築12回卒)



校友会報第67号で待ちに待った「母校を訪ねる会」の日程を知り、さっそく校友会事務局と連絡をとりながら同級会開催の準備に入りました。我々は3年前にも郡山で同級会を開いていて、この「母校を訪ねる会」については話題にしていたところです。

10月23日に郊外の温泉ホテルに会場を設定し仲間を

待ちました。遠くは大分や札幌から、また卒業後初参加者もいて久しい再会の喜びと明日を期待して夜遅くまで語りあいました。(因みに来年の同級会は大分です)

翌24日も晴天に恵まれ、JR「安積永盛駅」前から日大まで歩くことにしました。あの頃の記憶と現実を重ね合わせながら橋を渡り、アカシア並木の中へ、足元を確かめ周りを振り返りながら時間を掛けて日大へ辿り着きました。キャンパス内のゆったりとした環境や初めて見る存在感ある建物群に感動したり、昔ながらの北桜祭の雰囲気にひたりながら「日大は変わったなー」と仲間のほとんどが感じたこととおもいます。一方今は姿を消した木造校舎や雑木林などは忘れることが出来ません。

登録を済ませ、記念写真と懇親会に初めて臨んだ我々は当時の先生方と40数年前の懐かしい思い出にふけることが出来、期待の満足感を味わいました。しかしながら校歌齊唱に、ついて行けなかったのは残念でしたね。

10年後、最後の「母校を訪ねる会」にも我等同級生健康な体で参加出来ることを願っているところです。最後に日大工学部の益々のご発展をお祈りいたします。

## クラス会と母校を訪ねて

橋本 壽 (機械12回卒)



平成16年10月24日「母校を訪ねる会」に参加しました。

「光陰矢の如し」学窓を築立って40年、この時間は間違いなく郡山駅前の風景を変え、工学部の驚くべき変貌振りを現出していました。アカシア林の中の正門は威風堂々として私達が学んだ木造校舎は跡形もなく、総て鉄筋コンクリートの立派な姿に変り、石ころ道は立派に舗装されていました。当日は北桜祭の真っ最中で活気に溢れ、女子学生の数も多く、一段と華やいで見えました。

懇親会の前に急遽、坂野教授（機械12回卒の同期クラス生）が特別講義と構内案内をしてくれました。そ

れは感動の連続で母校の発展に胸を熱くしました。当 日は私達を歓迎するかの様な素晴らしい秋晴れで、安 達太良山、会津磐梯山がくっきりと望まれ、阿武隈川 河畔から見る風景は学生当時の記憶を呼び戻してくれ ました。

懇親会場での小野沢工学部長並びに加藤木校友会長 のご挨拶には、工学部の将来に明るさと頼もしさを感じました。当日配布された「母校を訪ねる会」出席校 友名簿では、私達機械12回卒が最も多い参加で大いに 盛り上がり、会場では菅野先生と親しくお話を出来、又思わぬ人との出会いもあって、訪問して良かったと 痛感した次第です。

前日には、郡山研修会館で2年振り第7回目のクラ ス会（機械12回卒同期生の会）を、柳沼先生と校友会 から手塚副会長にご出席頂き、総勢28名で開催しました。

柳沼先生からは「若さと健康」のパワーを頂き、手 塚副会長からは校友会の発展振りを話して頂きました。このクラス会も当初は10年毎、そして5年毎となり、最近は略2年毎の開催です。

今回北は北海道、南は滋賀県から集い、懐かしい顔 に笑みがこぼれ、風貌は多少変わっても杯を重ねる内 に40年前の学生に戻り、青春時代の希望に燃えていた 頃の思い出話は尽きることなく、正に「昔を偲び今を語る」で瞬く間に時間が過ぎました。皆60歳を少し過ぎ、定年退職して色々自適の人、趣味を活かしている 人、更に仕事をしている人、代表権を持って頑張って いる人、公職についている人など様々ですが、8名の 他界者を偲ぶ時、健康だけは大切にしようと2年後の 再会を約して散会としました。

二日間に亘り多くの感動を与えて下さった工学部、 校友会の皆様に厚くお礼申し上げます。

## 「母校を訪ねる会」に出席して

武野 秀夫（電気12回卒）



校友会事務局より平成16年度「母校を訪ねる会」開 催の案内状が届いた。対象者は卒業20年、30年、40年、 50年とあり我々は卒業40年（第12回卒業生）である。

当日校内では北桜祭が開かれており暇わいを見せて いたが正門からの桜並木をこんなにゆっくりと歩いたのは40年ぶりで感ひとしおでした。このような懐かしさの中一路会場である「ハットNE」で同期の仲間と 顔を合わせお互いにヤーヤーご無沙汰と挨拶、久しぶり に見る顔は年齢相応だ。現役の人、第二、第三で頑 張っている人、色々自適の人様々である。我々のクラ スは毎年毎に会ってはいたものの40年ぶりに参加した 人もいて懐かしさが一段とこみあげてきた。受付手続 キを済ませた後恒例の記念写真を撮りいよいよ懇談会 開催である。工学部長のご挨拶、なつかしい応援団の 披露など出席された同期の仲間は母校の発展振りや昔 ばなしに華を咲かせたり各自の近況など終始和やかな うちに懇親を深めた。宴も終盤に入り長老の小倉先生 のあいさつ、閉めで楽しいひと時が終わった。その後、 各々車に便乗り磐梯熱海のクラス会会場へ直行。クラ ス会では改めて個人の近況紹介など酒を酌み交わしな がら語り合った。次期幹事を決め、4年後を目処に再 会を約し翌日解散。続いて3次会と銘うって勇士のみ 7人、鳴子温泉郷中山温泉仙庄館（仲間の加藤敏宣社 長）へ紅葉と温泉を楽しんだ。さらに近くの鬼首地熱 発電所を見学40年前の磐梯小野川湖発電所見学を思 い出した次第であった。また近くの吹上温泉「峰雲閣」 の滝のある露天風呂に入り全員裸で記念写真を撮り誰 もが童心に返って秘湯を楽しんだ。翌日は鳴子こけし 会館見学の後、解散した次第である。

最後にこのような機会を与えて下さった関係者の方々 に感謝を申し上げると同時に母校のますますの発 展を御祈願申し上げます。

## 「友遠方より来る」

勅使河原 正之（土木22回卒）



孔子曰く、「朋あり遠方より来る、また樂しからずや」30年間ご無沙汰だった友人、10年前にも参加してくれた友人、合わせて13人ちょっと寂しい同級会となった。県外からは7名駆けつけてくれたが、大半は山形県からの友人で、お互い時折集まつては、懇親を深めているとのこと、大変うらやましく感じた。

感じたと言えば、開会の6時前後に会場のホテルハマツを大いに揺らす新潟中越地震。幸い郡山市は震度3であり、地震による被害はなかったと後で知ったが、福島県中建設事務所で地域保全グループ課長の佐藤辰夫君の携帯電話は鳴るわ、部下に電話で指示するわで、同級会どころではない様子。どうやら自ら出勤しなくとも良くなつたようで、後半は、笑顔で話題に花を咲かせていた。校友会からは、加藤木研会長そして来賓として中村玄正教授、長林久夫教授が駆けつけて積極的に話題の輪に入つてくださり、昔話や近況についての話しがはずみ、有意義な同級会であった。

次の日は、さわやかな秋晴れ。正門から校舎に向う桜並木には露店が所狭しと軒を連ね、時折学生の客引きの声が響く中、父母や生徒・近隣の人々で賑わいをみせていた。この度の同級会の案内に、出席の通知を出してくれた友人も、体調不良や台風被害の復旧工事に携わつてのことか、突然のキャンセルが数件あった。この度の新潟中越地震の死傷者数による被害規模は、1995年の阪神大震災以来のこと、ご父兄はじめ校友会の被災者皆様方に對し、心からお見舞い申し上げます。

とにかく、記憶と記録に残る工学部土木工学科第22回卒業生同級会であった。

## 「母校を訪ねる会」に参加して

### 宇野 芳人（建築22回卒）

早いもので、卒業して30年、初めての同窓会を大変楽しみにしていました。昔の面影そのままの同級生、髪が薄くなったり白くなったり、恰幅のよくなつたやつ、全てが懐かしい一時でした。

ただ、10月23日の6時前の地震には驚きました（福岡は殆ど、地震がありません）会場がホテルの13階の為、揺れが激しく、船酈い状態でした。仕事が構造設計なので、「ビルは大丈夫か」と言われ、「自分の設計したビルが不安だから、他人の設計したビルは、もっと怖い」と言い合っていましたが、次の日のニュースで、余の被害の大きさに、ビックリしてしまいました。

翌日、工学部を訪ねた時は、丁度、工学部祭当日と

いう事もあり、大勢の人で賑わい、華やかで又、校舎も立派になり、30年前とは格段の差で、時の流れを感じさせられました。10年後も是非、参加したいと思います。

郡山在住の同級生には、今度の会を開催して頂く為に、多くの労力を費やして頂き心より感謝致して居ります。

## 『30年ぶりの素晴らしい出会い』

### 圓谷 富雄（電気22回卒）



日本大学工学部電気工学科を卒業して、早いもので30年になります。

郡山市近隣の幹事7名が集まって3回の幹事会を開き、当時お世話になりました恩師や級友と30年ぶりの再会を願い、『母校を訪ねる会』に合わせて前日に電気工学科の同級会を行いました。お蔭様で恩師の松浦正博先生と松塚勇先生そして加藤木研校友会長にご多忙の中をご出席賜り、同級生も福島県と栃木県から13名が本当に久しぶりに集まって盛大に同級会を開催することができました。

恩師の松浦、松塚両先生から当時教わった講義のことや卒業研究のこと、最近のお仕事の様子などを伺い、また当時は学園紛争後の静かな環境に私たちが入学したことや体育部会の行き過ぎた勧誘の理由など、当時は知らなかつた一面を伺うことができました。また、オイルショック前で就職率が良かったことなど、なつかしいお話をいろいろと聞かせていただき、若かりし頃の私たちの姿をそれぞれに思い浮かべながら時間が経つのも忘れ楽しいひと時を過すことができました。

私たちも一人ずつ卒研や仕事の内容や近況を話しながら、変わりぶりを確認しあつたり、それぞれに当時の面影を思い出したり頷いたり、久しぶりの会話も弾み本当につかしい再会を喜び合いました。

今後も3年から5年に1回くらいの割合で同級会を

開くことを確認しあい、充実した今宵ひと時を満喫しました。

## 「母校を訪ねる会」に参加して

### 安江 和代（旧姓：佐藤）（工化22回卒）

母校を訪ねる会に先立ち、工業化学科の同級会を開きました。

参加者10名の中には、はるばる沖縄県や山口県から参加してくれた人もいました。みんなで学生当時の話や今の仕事の話などで大変盛会でした。

残念だったのは、1年生から4年生までクラス担当だった武者先生が7月に逝去されたことです。

訪ねる会当日は、北桜祭でしたので正門から桜並木の両側に食べ物屋の出店が並び大変にぎやかで私たちの学生時代を思い出しました。校内には、私たちが学んだ校舎がまだ残っており楽しく見学させていただきました。また、当時の先生は、ほとんど退官されている中、尾崎先生と後藤先生に会えました。まだまだ元気で先生達と午後より中庭で記念写真をとり、懇親会に参加して楽しく過ごしました。

これを期に、同級会を再び開きたいという声も上がり充実した学校訪問でした。お世話になりました学校関係者や校友会関係者、同級生の皆様には感謝いたします。

## 同級会と「母校を訪ねる会」に出席して

### 池上 浩喜（土木32回卒）



土木工学科第32回の卒業生20年ぶりの同級会が、10月23日(土)午後6時から行われた。会場に同級会と明記しなかったため、会場入口で顔を合わせても同級生と気付かずすぎていって、また戻ってきては「同級会会

場ですよね」と訪ねているハプニングもあった。20年の間に変化がある人、あまり変わっていない人様々であった。今回集まつたのは、北は秋田、東は千葉、南は名古屋、西は富山と世話を含め総勢19人。やや少ない感はあるが、我々の年代が置かれている立場を考えるとやむを得ないと思われる。楽しい宴が始まった時に、2～3度の強い揺れを感じた。新潟中越地震である、被災された皆様にはお見舞い申し上げます。自己紹介、近況報告と進むと、学生時代の懐かしい思い出が蘇り、酒に酔うにつれ20年前にすっかり戻って話が弾んだ。宴は大変盛上がり最後に日大校歌を大合唱。二次会三次会と楽しい一夜は終了した。

母校を訪ねる会は、10月24日(日)午前10時から開催された。記念撮影後、62号館（愛称ハットNE）の立派な建物で懇親会が開かれた。懐かしい先生方と再会し、10年後の再会を約して、それぞれの帰路についた。土木工学科32回卒の皆様、次回は是非参加を。

後日、同級会参加者の名簿及び懇親会での記念の写真(CD-R)、ビデオ(DVD-R)、工学部グッズ、郡山の銘菓を参加者に送付致しました。

最後に、今回ご尽力された校友会そして幹事の皆様に厚くお礼申し上げます。（卒業20周年同窓会幹事 加藤浩一 佐藤和男 高坂俊行 佐藤洋一 池上浩喜）

## 平成16年度「母校を訪ねる会」に参加して

### 兵頭 朗生（電気32回卒）



2004年10月23日「母校を訪ねる会」前日、故郷愛媛からの久しぶりの郡山到着は、手荒い歓迎でした。実に新潟中越地震の最中に到着でした。（この地震に被害にあわれた方にお見舞い申し上げます。）次の日は快晴。本当に気持ちが良く晴れた日になりました。卒業以来20年振りのキャンパスは、暖かい陽射しで私を迎えてくれました。私が、在学の頃、古田会頭の銅像の

前で記念写真を撮っている人達を横目で見ながら他人事のように思っていたのが、キャンパスに立ち、その主役となってみると、早20年という日々が過ぎ去ったのを実感せざる得ませんでした。

電気科32回卒業の出席者は、荒山、有田、加藤、日下、比企、森合、私の7名と少々、さびしい人数でした。しかし、私達の年齢ですと、仕事の第一線で働いている年代なのでスケジュールが取れないのでしょうか、次回の10年後の再会の時は人数も増えるのではないかでしょうか。

さて、キャンパスに行って一番最初に感じたのは、校舎が次々と新しくなっていることの驚きでした。特に、私達の頃は体育館の下に学食と売店があったのですが今は50周年記念館（ハットNE）というオシャレな建物の中にあってきれいな学食となっていました。この会のパーティーでも、校友会の粋な計らいもあり、学食カレーと豚汁をご馳走になりました。懐かしい当時の学食での喧騒が思い起こされました。

研究室の建物は、20年経った今でもその趣をとどめ、

## らくがき

10年前よりもさらに大きくなり施設も増えて、おどろいています。学生の明るさが印象的です。さらに10年後が楽しみです。

武藤泰雄（建築22回卒）

青春時代をすごした郡山に30年振りにも戻ってきました。当時、体育会スキー部に所属して、阿武隈川の土手を先輩にしごかれながらランニングした思い出があります。空気はかわってませんね。

高橋透（建築22回卒）

30年ぶりに母校をたずねて、学友に逢って、忘れかけていた青春が一瞬によみ返って来ました。あの時、ここですごした4年間が後の人生にいかに大切だったかを感じました。今日をまた、新たな出発点にしてがんばっていきます。

平山淳一郎（建築22回卒）

30年ぶりの母校も環境が変り時代の変化を感じた。学生時代過した、下宿、アパートも新しい建物に変り道路も広く、きれいになり記憶をたどるのが大変だった。天気も良く気持がよい。

荒木田一男（建築22回卒）

大学の寮、アパート、下宿などをまわりよくぞ30年やってきたなと感じた。仕事中心の生活だがこれからは、気分だけでも若いころにかえりたい。生き残っ

た22回卒の皆さんと10年後もお会いしましょう。

西島衛治（建築22回卒）

昨晩は息子の下宿に泊り、親子二代お世話になるとは…。しかし30年前の学生時と現在とはだいぶ異う様です。ここに来る30年前の自分に会えるかと楽しみにしていました。郡山は基本的には昔のままの様な気がします。10年後もかならず来ます。

漆畠正充（建築22回卒）

予定では10名ぐらい出席でしたが、3名になってしまいました。学園内の昔のわらわらはありますかが、なつかしい思い出にひたりました。

水野宏（工化12回卒）

10年ぶりに訪れ、なつかしく昔を思い出します。同じクラスのものが3名と少なく残念です。益々の大学の発展を期待します。

小形憲雄（工化12回卒）

思い出す事が余りない、寒いことは思い出す。

杵田博（工化12回卒）

久しぶりに母校へ来ました。友人がふけていました。私もふけました。でも大学はむかしのままで、思い出がこみ上げます。

池上浩喜（土木32回卒）

来る前は参加するかどうか迷いましたが、来て本当によかったです。タイムマシーンにのった感じというはこういうことを

思いつ切り感動がこみ上げてきました。私としては、当時、小林先生の指導で、卒業研究を進めてきましたが、研究室のドアの前に立つと20年前にタイムスリップしたようでした。

もうひとつ。北桜祭で感じたのは、女子学生の多いことです。新しい学科が増えたからだと思いますが、キャンパスの中が華やいでみました。私達の頃は、女子学生が学年に2~3人という感じで右を向いても左を見ても男ばかりという状態。今の学生がちょっと羨ましく思いました。まあ、男だらけの生活というのも人生の中では、貴重な体験でしたが。

さて、パーティーには、電気科では、松塚先生、長澤先生が御出席いただき大変に盛り上がりました。パーティー最後に、応援団諸君の指揮の下、久々に大声で歌った校歌を最高のお土産として心に仕舞い、10年後の母校を訪ねる会には、もっとたくさんの人の笑顔に出会えることを願いつつ、帰路に着きました。

最後に、我が母校永遠なれ！ありがとうございます。ありがとうございました校友会。

いキャンパスで学びたいですね。  
（でも20年前はそれはそれで良かった！）

樋口正行（機械32回卒）

母校をたずねる会に参加して、なつかしい顔を見る事ができてうれしいです。あのころのことをなつかしく思い出されます。また10年後会えるよう健康に気をつけておたがいがんばりましょう。

廣瀬裕一（土木32回卒）

20年ぶりの母校の変化をおどろいています。10年後、20年後の変化をたのしんでいます。

鈴木和弘（土木32回卒）

卒業して20年すぎましたが、同級生に会うと20年前にもどるようです。新しい校舎に古い校舎、なつかしく思い出しました。このような機会を開催していることはとてもありがたく思います。在学中に母校をたずねる先輩たちの前にで演奏やドリル演奏したことを見出しました。

丸山康弘（土木32回卒）

20年ぶりに来て、変わったやつ、変わらないやつ皆おもかげあります。なつかしく思いました。おどろいたのが40年間お世話になったアパート（駐車場前の盛岡社）がそのままあった事かな。今度また学生時代につるんだ連中と来たいと思いました。

岩田伸一（土木32回卒）

久し振りの母校！何と変わってしまった事か？（とん汁の味は変わっていませんでした!!）もう一度学生に戻ってこのすばらし

“満40年早いねー”

秋の空楽しい一時を過しました。

河野宣之（機械12回卒）

※「らくがき」は母校を訪ねる会入口に置いた大学ノートへの記述の写しです。ここに掲載させて頂きました。

## クラブOB・OG会報告・その他

### 第5回総会は、演奏に加え、山行き、絵画展などで活躍する仲間の近況報告で盛り上がる

管弦楽OB・OG会広報担当 桃井 忠男（電気12回卒）



第5回総会は会則通り8月第一土曜日の7日午後3時から東京有楽町の『ニュートウキョースキヤ橋本店』の9階“LA STELLA”で行われた。今年もO B・O G会の活動に期待を寄せる24名の仲間が都合をつけて参加した。懇親会では、エキジビション演奏の他に全員参加の合唱を行い、親睦を盛り上げたが、初参加の松永裕幸氏（62入学・トローンボーン）に加え、津川博保氏（58入学・バイオリン）、西原稔彦氏（60入学・バイオリン）、篠原義明氏（67入学・ファゴット）の3氏が4年ぶりに参加し、会は一層活気が出て、皆が続けることの意義を改めて理解する機会となった。

会場の中に入ると、エキジビションのリハーサルを続ける仲間の音が迎えてくれた。定刻に始まった総会で千秋暢良会長（58入学・バイオリン、「船橋フィル・チェロ」「千人のチェロ」会員）は「定年退職者が増えてまた合奏の仲間が増えてきております。これからも羽鳥指揮者の指導のもとに頑張り楽しみましょう」と挨拶した。総会では引き続き、平成15年度活動報告と会計担当運営委員の小川明彦氏の長期海外出張に伴う後任選考、会費振込の新納入先郵便局口座が「記号10530番号65105371」へ変更や平成16年度活動計画の同意、決定が行われた。

懇親会では最初に恒例の演奏会で「ドイツ舞曲」、「デベルティメントKV213」を奏でた。続く近況報告では、「読売山岳写真会、一水会展、湖日会展、写真展・東京一期一会、絵画個展、小田急山行会などで、音楽の趣味を生かしながら活躍している」ことや「市

民オケで演奏活動を続けている仲間が15名もいる」など頗もしい報告があり、演奏曲目や技術論、健康管理術など、盛りだくさんの情報交換をし合って、会は午後6時に閉会し、更に二次会に流れていった。

エキジビション演奏への参加はどなたでも可能です。東京近郊の練習は、毎月足立文化会館で月1回行っていますが、その準備では羽鳥運営委員手作りの『一人練習用CD（「オンリー・ワン」「マイナス・ワン」「全器楽演奏」の三部構成）』の配布で、事前練習がよりしやすくなるように工夫しています。

今回参加できなかった仲間も是非、来年の総会には参加して、演奏や懇談を楽しもう。

（文責：桃井忠男、写真は演奏する仲間：能登正俊氏撮影）

### 第18回はぐるま会

代表幹事 滝口 武志（機械11回卒）



第18回はぐるま会（昭和38年3月卒業・機械工学科）を久し振りに東京で開催しました。6名の幹事会を1年間設置、場所、開催日等を決め、案内書配達し、去るH16年10月17～18日実施した。懇親会には29名参加（於、東京台場ホテルグランパシフィック・メリディアン）東京湾を一望できる会場で楽しい一時を過しました。翌日は東京トレンドスポット見学と題し、お台場をスタートし、新橋汐留、国会議事堂、青山、六本木、品川、新幹線駅までバスで1巡しました。

初めて臨んだ方も多く、好評であった。次回は、初めて選んだ北海道の釧路市で今年秋に行うことになりました。

今回の特徴は6名の幹事が毎月会合を開き、準備の為の話し合いと、ゴルフを交え、楽しく幹事会を遂行したことでした。

## 支部活動

### 北海道支部活動報告

北海道支部長 岡本 繁美（土木16回卒）

本年度支部総会は4月28日本部より加藤木会長をお迎えして、北海道支部会員60余名の参加により例年通り、総会及び懇親会を行いました。懇親会では郡山での生活や思い出話に華を咲かせ、又次の総会で再会を誓い絆を深める一日となりました。又、9月26日には、旭川にて、道北支会。10月1日には函館にて、道南支会を行い、それぞれ二十数名ずつ集まり、郡山での、下宿生活等の昔話や近況報告などに大変楽しいひとときを過ごしました。この様に北海道支部は8支会でも懇親会を行い同窓仲間の絆を確かめ合っています。17年度も4月8日（金）午後6時より同窓会総会及び懇親会を行います。又、釧路で9月頃に支会懇親会（ミニ同窓会）を予定しそれには北海道支部長ほか役員も出席となっています。尚、北海道支部では北海道にお帰りになった方、又、新卒生の参加を歓迎しています。

### 北陸支部活動報告

北陸支部長 鈴木 隆（建築14回卒）



校友諸兄におかれましては益々御清祥のこととお慶び申し上げます。

当支部は七月三十一日新潟市内のホテルサンルートにて、四十余名出席しての第四回定期総会を開催し、本年度活動計画と魅力ある会運営について活発な意見交換を行いました。終了後は父母会新潟支部との合同懇親会を校友夫人同伴で盛大に挙行し、恒例になった校歌・応援歌・日大節などに声を張り上げたりと、和

氣藹藹の一時を過ごしました。

本年度の新潟県内は、七月十三日の集中豪雨、十月二十三日に大地震が発生し、多くの会員の御自宅や関連企業に大被害を受けましたが、学生時代に培った強靭な精神力でこの難局を突破しようと頑張っております。又、寸断された交通機関やライフラインの復旧における会員の活躍振りには目覚しいものがあり、現在も継続中であります。

当支部会員は苦境にめげずに益々頑張って参る所存ですので、校友諸兄の御指導、御鞭撻の程よろしく御願い致します。

### 関東支部活動報告

会長 星野濱三郎（土木14回卒）  
事務局長 永田 直史（機械29回卒）



平成16年11月6日（上）工学部校友会関東支部栃木県校友会設立総会に来賓として小野沢副総長・工学部長をはじめ、福田富一校友会栃木県支部長（今回、栃木県知事選に当選）、星野章栃木桜工会会長、佐藤勉（土木23）衆議院議員、加藤木工学部校友会会長、並びに各校友会役員代表者のご出席のもと宇都宮中心街にある二荒山会館にて開催いたしました。

栃木県では、以前より工科系校友会であります桜工会をはじめとして各会が活発に活動しております。

この度、栃木県校友会員10数名の発起人が精力的に設立にむけて、各科、地域の校友に呼びかけを行い100名程のご参加を頂き工学部栃木県校友会を設立する運びとなりました。会報をおかりいたしまして、ご報告いたすと共にご尽力いただいた皆様に心より感謝を申し上げます。設立について前野巖（土09）発起人代表が挨拶をされた後、設立総会を出席校友の承認を得て、岩見力（土12）仮議長のもと設立総会を開催し、

会則と役員について発起人より原案を提示させていただき、全議案ともご来賓立会のもと承認されました。総会終了後、総会で承認を得ました星野濱三郎会長より「本日設立された工学部栃木県校友会を県内校友の絆と親睦を深めてゆくため各学科間（土木、建築、機械、電気、化学、情報）輪を広げていきたいので皆様の協力を得たい」と挨拶されました。

続きまして、各来賓より設立の賛同と共にご支援の詞をいただきました。

懇親会におきましては、村田先生はじめ工学部各支部代表者の方々に支部活動など近況報告を頂きました。又、昨年より日本大学校友会にて強力に応援しております新春箱根駅伝につきましては、箱根駅伝振興特別委員会の特別副委員長であります手塚公敏（土木16回卒）先輩より昨年の活動結果と引き続きの応援依頼のご挨拶をいただきました。さらに懇親会では、県内各地域、各学科の校友の懇親を深めていただき、又最後には、現役應援団のリーダにてエンジニア校歌並びに日本大学校歌を齊唱し盛況に終了することが出来ました。この場をお借りしまして設立の報告とさせていただきます。

最後に、今回ご都合で出席できない旨のご返信を頂いた方々は約100名いらっしゃいますが、いずれにしましても校友の絆という意味では1300名中230名の方につながりました。今後、校友会活動を通じ多くの絆をつなげようと役員一同努力してまいります。本校友会誌を通じ、校友の絆にご賛同いただける諸先輩がいらっしゃいましたら下記事務局までご一報いただければ幸いです。

## 四国支部活動報告

四国支部事務局長 牧野 隆次（建築22回卒）



四国支部総会は7月17日（土）再開発が完成したサンポート高松地区にある全日空ホテルクレメント高松で本年も家族会として開催いたしました。

総会は北岡支部長（化14回卒）の挨拶で始まり事務局より事業報告及び会計報告がありました。懇親会に入り本部の村田事業部長から大学の近況報告があり谷久顧問（土8回卒）の乾杯によりパーティーが始まりました。早谷川くん（建31回卒）の司会による会員紹介のあとジャズバンドの演奏にうつりました。山口君（土25回卒）のベースの飛び入りもあり今回も大変感慨深いものになりました。全員で校歌を歌い、佐々木先輩（機11回卒）の締めの挨拶で閉会し来年の再会を約束しました。開催県以外の会員や若い会員の参加が少なく、より多くの参加が望まれます。

## 九州支部活動報告

九州支部支部長 上村公仁 隆（建築28回卒）



この度、九州支部長に選出された昭和55年卒業の上村公仁隆です。今年46歳の私のような若輩者が立派な先輩方を飛び越して、支部長になっていいものかと思

っていましたが、支部総会で承認していただきました。どんな組織でもそうだと思いますが、役員がいつも同じ顔ぶれで何年も経つとマンネリ化して、いずれは爺さんばかりになり、若い会員が入ってこない状況になります。九州支部での役員の若返りは支部活性化のために若い卒業生をたくさん校友会に出席してもらうため、必要なことであったと思います。今回の役員改選では理事や顧問は年配の大先輩方にお願いして、事務局や会計は40代の方になっていただきました。その他に学科担当や地域担当、学年幹事など多くの方に役割をお願いしました。実は私が九州支部の総会に初めて出席したのは25歳の頃でした。その頃は営業のために、いろいろな方面に人脈を求めて出来るだけ会合に出席していました。あれから20年も校友会九州支部の活動に参加してきました。今後、どのような形であれ、多くの若い校友会員が支部活動に加わってほしいと思っています。

ところで、九州支部の活動ですが、毎月第3木曜日にアカシヤ会を行っています。アカシヤ会は場所と日時は決めていますが、出席は自由にしています。案内はメールやファックスで定期的にいつものメンバーに送っています。日大関連の集まりでもアカシヤ会のことを紹介しています。総会などで初めて出席した方がアカシヤ会にも参加してくれると賑やかになります。今後は新しい校友会員が参加していただけるように努力したいと思います。

## 支部報告・アカシヤ教育研究会

幹事長 永田 進（建築22回卒）



工学部は創設以来半世紀にわたって、多くの技術者の育成をはかり、我が国の産業の発展に大きな貢献をしてまいりました。しかし、それと同時に、あまり知られていないことがあります。高等学校を中心に小・中学校、専門学校、高等専門学校、短大、大学の

教育機関に多くの優秀な人材を輩出して来たということがあります。そのなかでも、工業高校の工業専門教員は校長・教頭の管理職を含め、その数（現職教員）397名（平成14年）と全国第1位を誇っております。さらに誇りとすることは、戦後、昭和30～40年代の工業高校の充実・発展期に全国各地の指導者として大きな功績を残された方々のほとんどが我が工学部の先輩でありました。現在、高校教育の抱える問題は多くありますが、工業高校はスペシャリストを養成、大きく開いた大学への進学等、そして進学・生徒指導面での大きな実績により全国どの地区でも工業高校の人気は高くなり、改めて工業高校教育の重要性が再認識されております。ですから、『日本大学工学部が我が国の工業高校の発展の礎をつくった』と言っても過言ではありません。特に、戦後長くアメリカの占領下にあり、本土と大きな教育格差のあった沖縄でその教育生涯を工業高校教育に捧げ「沖縄工業教育の父」と言われた親泊元高先生（元、沖縄工高建築科長）の業績は工業高校教育史に刻み込まれた金字塔であり、永く語り伝えられなければなりません。

なお、少子化の昨今、母校の置かれている立場も厳しいものがあります。これに対応できるのは、何と言っても校友の力、なかでも本会『アカシヤ教育研究会』の会員であります。皆様のご協力・ご支援をお願いしたいと思います。

### ◎ニュース

・教職課程特別講演は本年度も、平成16年11月6日（土）に実施されました。

『教員に求められる資質』と題して長年福島県工業高校教育のために尽くされ現在、福島県立福島工業高校校長として県内工業高校トップに立ち県内はもとより全国の工業高校教育の指導にあたっておられる関根敬次先生（建築16回）がご講演されました。90分にわたり先生の長年のご体験のもとづいたお話は実に説得力のあるもので後輩にあたる学生に大きな感銘を与えました。先生は専門の建築を通しての教科指導はもちろんのこと、厳しさとやさしさを兼ねそなえての生徒指導は生徒指導主事のご経験を通じ後輩教員に大きな影響を与えるました。そして、前任校の塙工業高校校長時代は同校を進路指導を核に一躍工業高校の名門校に育て上げました。このような先輩を持つことは校友にとって大きな誇りでもあります。

・久保田幸正先生（建築19回）新潟県立塙沢商工高校校長にご就任。

新潟県教育委員会にて県内の高校教育の指導にあた

っておられましたが平成15年度末の異動により塩沢商工高校校長にご栄転。先生は工学部をご卒業後、県立高田工業高校（現、上越総合技術高校）に赴任、その後、教頭、指導主事等をご歴任されました。工学部時代は佐藤平教授のもと研究に励むとともに剣道部でも活躍され当時の師範が現在事務局次長の森栄一先生であります。先生は、このような幅広いご活躍のかたわら後進の育成にも努め、多くの教え子を母校に送り込みさらにその後も面倒を見られております。現在、母校、上越総合技術高校に勤務され県内工業・建築教育の中心的お立ち場である横尾聰先生（建築28回）のH.R.担任でもあられました。先生の面倒見の良さそして卓越した指導力は赴任早々の塩沢商工高校でも発揮され、同校を来春の『全国高校野球大会の21世紀枠候補校』に育てあげました。先生は新潟県内のアカシア会の中心的お立ち場でありますので本会へのご指導をお

11月17日㈬ 新潟日報朝刊より

## 塩沢商工を推薦

21世紀枠候補に

県高野連  
日、来春の全国選抜高校補校として本県から塩

野球大会の21世紀枠候補校として本県から塩

北信越5県の各候補は決めた。塩沢商工は今秋の北信越高校野球県大会で初の4強入りを果たしました。なごみが評価された。

12月上旬の地区選考会議で1校に絞られる。全国各地から推薦された学校の中から、来年1月の最終選考会議で21世紀枠が決まる。

願いするごとに先生のますますのご活躍を期待したいと思います。

・須藤良平先生（土木工29回）新潟県立県央工業高校教頭にご栄転。

県立高田工業高校（現上越総合技術高校）に勤務されておりましたが、平成14年度末の異動により県立県央工業高校教頭にご昇格されました。先生のますますのご活躍を期待すると同時に久保田校長先生を補佐して本会へのご指導ご支援をお願いしたいと思います。

・太田潤一先生（電気工34回）北海道教育委員会高校教育課指導主事にご栄転。

道立琴似工業高校に勤務されておりましたが平成15年度末の異動により北海道教育委員会高校教育課指導主事として異動。全道の工業高校の教育指導にあたる重責ですが、アカシアの森で培った力と若い情熱とで新しい北海道工業高校教育の発展に寄与されることを『アカシア教育研究会』挙げて応援・期待いたします。

## 校友レポート

### 品質マネジメントシステム（QMS）審査員の仕事 —自己責任を果たす企業の品質マネジメントシステムを審査する—



財団法人日本規格協会  
審査登録事業部 主任審査員  
**角田 啓子**  
(旧姓:三浦) (工化22回卒)

#### 1. 序

私は現在、財団法人日本規格協会審査登録事業部（審査登録機関）に所属する【品質マネジメントシステム主任審査員】、そしてこの様な審査員や審査員候補生をトレーニングする株式会社テクノファ（審査員教育機関）で【食品安全マネジメントシステム審査員コース主任講師】を務めている。特に、ISO9001の審査を通じて、

食品関連分野及び医療・福祉関連分野の組織（会社、工場、病院、福祉施設等）の経営を支援している。

まず、簡単にISO9001：2000について紹介する。ISO（International Organization for Standardization：国際標準化機構）が定めた、品質マネジメントシステムについての規格である。製品の品質ではなく、品質マネジメントシステム（仕組み）の規格であることが特徴である。この規格は次の8つのコンセプトで書かれている。

- ① 顧客重視 組織はその顧客に依存しており、そのため、現在及び将来の顧客ニーズを理解し、顧客要求事項を満たし、顧客の期待を超えるよう努力すべきだ。
- ② リーダーシップ リーダーは、組織の目的及び方向を一致させる。リーダーは、人々が組織の目的を達成することに十分に参画できる内部環境を創りだし、維持すべきだ。
- ③ 人々の参画 全ての階層の人々は組織にとって

根本的要素であり、その全面的な参画によって、組織の便益のためにその能力を活用することが可能となる。

- ④ プロセスアプローチ 活動及び関連する資源が一つのプロセスとして運営管理されるとき、望まれる結果がより効率よく達成される。
- ⑤ マネジメントへのシステムアプローチ 相互に関連するプロセスを一つのシステムとして、明確にし、理解し、運営管理することが組織の目標を効率よく達成することに寄与する。
- ⑥ 繼続的改善 組織の総合的パフォーマンスの継続的改善を組織の永遠の目標とすべきだ。
- ⑦ 意思決定への事実に基づくアプローチ 効果的な意思決定は、データ及び情報の分析に基づいている。
- ⑧ 供給者との互恵関係 組織及びその供給者は独立しており、両者の互恵関係は両者の価値創造能力を高める。

組織が、これらのコンセプトから導かれた要求事項を満たす仕組みを持ち、自らの責任で健全に運用されていることを、第3者審査登録機関に所属する審査員によって審査され、判定委員会の審議の後、登録が認められて初めて「当社はISO登録組織です。」と公表できる。また、この登録は永久ではなく、半年～1年の間に1回以上のサーベランスで登録継続が、3年毎に更新審査で更新の可否が審査される。

現在の認証登録件数：38514件 (JAB 2004.10.20)

このISO9001の登録組織であることが、良い会社、良い工場、良い病院の“しるし”になってきている。

## 2. 食品安全マネジメントシステム審査への期待

2005年秋には、食品安全の技法（HACCPシステム）をマネジメントシステム（ISO9001）の中で運用する、食品安全マネジメントシステム（ISO22000）が発行される。

この規格の発行の背景には、世界の食糧問題—食糧の世界的な調達・貿易、BSEや鳥インフルエンザのような食品安全への新たな危害の発生等の一端がある。我が国でも、毎週、新聞に回収広告が出されるように、食品製造業者による不良品の販売、不正表示、農薬汚染された野菜の輸入等の問題が発生している。また、日本は食糧自給率がカロリーベースで約40%と自給率が低いにもかかわらず、地球規模の人口増加、自然環境・気象の変化による食料調達事情は悪化へと進んでいる。

この生命に不可欠な食物が、将来に渡って、確実に

私たちの口に届くように（事故による廃棄量の低減、栄養損失の低減）、すなわち安全で栄養回収効率の良い食料調達・製造の先駆けとなるFrom the Farm To the Table（農場から食卓まで）にあるフードチェーンの各企業に対し、審査を通じてサポートすることが重要になる。

私たち審査員は、購入者（消費者）の代行として企業を審査する。目の前にいる企業が審査の相手であり、この企業の経営を支援するための審査を行うのであるが、消費者の代表であることを常に心の真ん中に置いて、マネジメントシステムが健全であるかを監視しなければならない。

ISO登録制度は民間の活動であり、食品衛生法等の法律による行政の許認可制度とは違う。ここに、企業の自己責任が表明される。許認可制度ではないのになぜ登録をするのか。企業が顧客の満足（安全、安心、美味しい）を得ることによって存在価値があることを認識し、自らの責任でその活動を続けることをコミットメントすることだからである。企業として、食品の安全と品質を創造する大切で魅力的なプロセスを自らの責任で管理することは当然であり、法規制があるからやるという許認可のための管理は自らの魂を捨ててしまったと言える。企業は自ら考え、改善の仕組みを持ち、そして自ら改善の道を歩むことによって、食品の安全と品質を作り上げてゆくという自己責任を持つべきであろう。私たちマネジメントシステム審査員は、不良品やミスを見つけだしに行くのではなく、安全で魅力的な品質を持った食品を作り上げるマネジメントシステムが有るか、システムは有効に働いているか、システムは効率的に働いているかの目線で企業活動を支援していく。これが製品審査ではなく、マネジメントシステム審査である。

以上

問い合わせ先：財日本規格協会 審査登録事業部

〒100-0014 東京都千代田区永田町2-13-5 赤坂エイトワンビル8F

Tel : 03-3592-1401 Fax : 03-5532-1250

URL <http://www.jsa.or.jp/>

次のISO審査登録及び第三者評価についてお答えできます。

- ・品質マネジメントシステム審査登録 (ISO9001)
- ・環境マネジメントシステム審査登録 (ISO14001)
- ・情報セキュリティマネジメントシステム審査登録 (ISMS)
- ・食品安全マネジメントシステム登録審査 (ISO22000)
- ・労働安全マネジメントシステム (OHSAS18001)
- ・JISマーク公示検査・認定審査 (JISマーク表示)
- ・福祉サービス第三者評価

## 第20回都市公園コンクール国土交通大臣賞受賞

### 心静緑感広場（親水施設を有する雨水ろ過長期保水施設の設計・施工）



建築学科 教授  
出村 克宣

2003年4月に取得したISO14001の「環境方針」に基づく環境整備の一環として、正門の西側（旧職員宿舎前）に施工した静緑感広場（親水施設を有する雨水ろ過長期保水施設）が、(社)日本公園緑地協会主催の第20回都市公園コンクールにおいて、国土交通大臣賞〔施設・材料・工法（大規模施設）部門〕を受賞した。この施設の開発は、本学の環境推進委員会及び県内の企業で構成される雨水利用研究会との共同によるものであり、次世代工学技術研究センターの第2プロジェクトにおける研究成果を基盤にしている。又、環境保全・共生共同研究センターで研究・開発中の風力及び太陽光発電システムから電力供給を得ている。つまり、今回の受賞は、工学部の研究部門及び事務局並びに、地域企業（O B企業を含む）との産学連携の成果であり、今、工学部が目指している新しい形での大学のありかたの一つを具現化したものといえる。ここでは、その施設の概要について述べてみたい。

この施設のコンセプトは、「通常時はもちろんのこと、非常災害時においても生活用水として利用できる雨水を長期間にわたって貯留できる施設の開発」であり、施設の概要は次の通りである。

- (1) 施設構成：①原水槽、②地下貯留水槽（貯留水量：130 t）、③集水緑地帯、④水循環システム
- (2) 付属施設：①散水装置、②貯留水槽水量管理システム及び管理データの自動配信システム、③親水池

なお、「原水槽」とは、周辺建物で集水した雨水の一次貯留槽であり、雨水中の微粒分の沈澱ろ過機能を有する。「地下貯留水槽」とは、底部に水質浄化用ボ

ーラスコンクリートブロック及び機能性接触材を敷き並べた層を有し、雨水がその層を通過することによって、生物浄化される機能を持つ貯留水槽である。「集水緑地帯」とは、ろ過材を敷き詰め、その上に芝生を植栽した緑地帯で、貯水槽上部及びその周辺に設けてある。集水緑地帯は、降雨の物質的ろ過機能を有すると共に、芝生（の根）が栄養塩類を除去する機能を有し、ろ過層に生息する微生物による生物浄化が期待できる。なお、集水は周辺施設の屋根からも行われる。「水循環システム」とは、貯留水槽内の水を水循環用ポンプによって、その上部の集水緑地帯に常時循環し、良好な水質を維持するシステムである。循環水は、貯留水槽上部のろ過層内に埋設してある散水管を通して、循環する。

雨水ろ過長期保水施設の概念図を図1に、その概要を写真1及び写真2に示す。

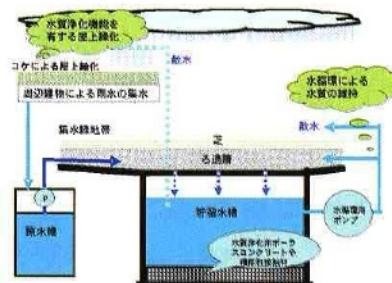


図1 雨水ろ過長期保水施設の概念図

心静緑感広場には、この施設に親水池を敷設しており、池にも貯留水を循環して、池に棲息する魚が水質悪化に対する危機管理モニターの役目を担っている。

この施設については、現在建設中の新教室棟（仮称）にも整備予定（貯留水量：約500 t）であり、通常時、貯留水はトイレ用洗浄水として使用される。



写真1 (左) 親水池を有する雨水ろ過長期保水施設

写真2 (右) 地下貯留水槽上部の集水緑地帯

## 応援團『チアーリーダ部』デビュー！！

應友会

会長 [應援團OB会] **深野 一男** (土木20回卒)

副会長(事務局) **永田 直史** (機械29回卒)

**押忍** 昨年、日本大学工学部應援團復活について本会誌を通して報告させていただきました。その際、「学校、先生、学生、そして社会」に愛される應援團を目指すということで今年は地道に現役とOB共々活動してまいりましたが、去る平成16年10月23日(土)に開催されました北桜祭演舞会の管理棟前会場にて應援團のリーダー公開と應援團チアーリーダー部による『チアーリーダー公開』を行いました。

当日は、曇り空ながら大変たくさんの方々、職員、学生、一般のお客様がお待ちの中、男女共々リーダー公開をさせていただきました。特にチアーリーダーが始まるとや否や更に人垣が厚くなる程のお客様に見ていただき北桜祭会場の中でも一際目立つ存在となりました。チアの内容としましてもたった1年の活動とは思えない最高の出来でありまして終了時には、お客様から本当に多くの拍手をいただきました。

今後につきましては、現役とOBの連携を更に発展させ、名実共に應援團としての活動に励んでいく所存であります。應援團OB、校友の方々におかれましても力強いバックアップを宜しくお願い申し上げます。

最後に、應友会(應援團OB会)は應援團復活の活動

に際しまして復活主旨の同意を頂いたOBの方々にご連絡を申し上げておりますが、一部音信の届かなかつた方、又は今後の活動に期待し、現役應援團活動に新たに同意していただけるOBの方がいらっしゃいましたら下記事務局までご一報いただけますと幸いです。押忍



## 元工学部長 國分欽智先生 瑞宝中綬章



昨年の秋の叙勲において、元工学部長の國分欽智先生が「瑞宝中綬章」受章の栄誉に輝きました。これは多年にわたる教育・研究への貢献並びに学会・地域への貢献が認められたものであり、先生個人の栄誉にとどまらず、校友を始めとする関係者にとっても大変喜ばしいことです。先生は工学部を卒業された校友として、この様な価値ある大きな叙勲を受けられた初めての方であり、大変

誇りに思う次第です。

昭和28年に電気工学科を卒業後に附属高等学校にて教鞭を執られ、その後、昭和44年に母校の工学部へ転任されて学生の教育に携わってこられました。今日までの長きにわたる情熱溢れた教育・研究、立派な卒業生輩出並びに学部発展のために多大なご尽力をいただきました。特に、工学部長時代には情報工学科の設立を始め、学部発展のために21世紀に向けての数多くの改革やビジョン作りにご奮闘されました。

先生の栄誉を讃え、皆さまと共に喜びを分かち合うための受章祝賀会を市内のホテルにおいて1月22日に催したところ、沢山の教職員・校友の皆さんのが参加の下で盛大に執り行われました。先生の益々のご健康とご活躍を祈念いたします。

東芝府中ラグビー部  
**大野 均** (機械49回卒)

2003年春、私はニュージーランドで3ヶ月間のラグビー留学を経験した。ニュージーランドは世界においてラグビーの先進国である。ここには世界最高峰のラグビーリーグが存在する。ニュージーランド、オーストラリア、南アフリカの南半球3カ国の地域代表12チームで争う「スーパー12」と呼ばれるリーグ戦である。私は留学中、このスーパー12を生で観戦し、驚愕した。それはラグビーの試合というよりは、ショーと呼ぶにふさわしかった。老若男女集まる超満員の観客席は静まることがなく、グランドではチアガールやチームマスコットが盛り上げている。そして私が最も驚いたのは、世界トッププレイヤー達によるそのプレイである。スピードもパワーも、日本のそれとは桁違いの彼らのプレイは、この地の人々がラグビーに熱狂する理由を理解するのに充分であった。

現在、日本ラグビー界は大きな転換期を迎えており、そのひとつが2003年から始まった「ジャパンラグビートップリーグ」である。このトップリーグとは、それまであった東日本、関西、西日本という3つのリーグの枠組みを廃止し、日本のラグビートップチーム12チームを1つのリーグとした、総当たりのリーグ戦である。つまりは、それまで1月の全国社会人大会の準決勝、決勝にならないと実現しなかった強豪同士の戦いが、9月のトップリーグ開幕とともに全国各地で展開されるのである。この「ジャパンラグビートップリーグ」の活動目標は以下の通りである。

### 1. 日本ラグビーのトッププレイヤーを強化する。

(1) 日本ラグビーのトップチーム同士による切磋琢磨により、プレー水準を高めトッププレイヤーの質を相乗的に高める。また、グローバルレベルで活躍できるプレイヤーの育成を目指す。

(2) 最高峰のリーグで戦うことで、プレイヤー、指導者、その他関係者の意識を向上させる。

### 2. 日本ラグビーの水準向上に貢献する。

(1) トップリーグで得られる強化ノウハウや戦略・戦術を集約・蓄積し、草の根の普及活動から日本代表強化活動までフィードバックできる仕組みを構築する。

(2) 競技上の戦略・戦術、審判技術やメディカルなどラグビー全般の各種技術レベル向上、および競技運

営レベル向上の施策の場として貢献する。

(3) 欧州および南半球の強豪リーグとの交流を積極的にはかることで、日本ラグビー全体のレベル向上に貢献し、世界の強豪リーグに並べて認知されるリーグを目指す。

### 3. ラグビーファン拡大への牽引役となる。

(1) 「感動を呼ぶ白熱したレベルの高いゲーム」を数多く実施することで、より多くのファンがラグビーを楽しめる環境を提供する。

(2) トップリーグを通じて、ラグビーの魅力をより多くの人々に認知される機会を増やしていく。

(3) ラグビー観戦の楽しさを、ダイナミックなプレーを見る興奮、他のスポーツとは異なる応援スタイル、魅力ある会場の雰囲気を通じて、人々に伝える。

### 4. 企業のスポーツ振興への貢献、地域との協働によるスポーツ振興を達成する。

(1) チームおよびプレイヤー支援など、企業によるスポーツ振興への貢献を達成できる環境を整備する。

(2) トップリーグ開催地域、またはチーム活動地域におけるスポーツ文化振興を目指した関係構築活動を支援する。

私が2年前、ニュージーランドのスタジアムで感じた熱を、次はプレイする側として、このトップリーグで少しでも多くの人に伝えたいと思う。そして日本代表の桜のエンブレムを背負う者として、世界に日本のラグビーを強く印象付けられるよう、これからも日々精進していきたいと思う。



筆者は右から2人目

# 日本大学工学部創設60周年記念事業資金の募集について

この度、日本大学工学部創設60周年記念事業資金の募集にあたり、平成16年6月1日から平成17年2月16日までに募金をいただいた校友の方々の御芳名を掲載させていただきました。なお、引き続き平成21年3月31日まで資金募集を行なっておりますので、御協力よろしくお願いいたします。また、掲載は御入金順で掲載させていただきました。

## 寄付者御芳名(敬称略)

介宣士夫和光夫淳徹三志士隆之榮栄弘暁雄仁真朗雄治亮賢一夫藏治明力弘章彦彦央一次哉樹正則純尚徳治憲規仁広吾夫則孝廣雄男剛治良晃忠紀宗隆一幸貴零裕将達清照良得康勇尊間雅迪賢衛賢安隆昭和昌正洋正宏義宏利慎康幸昭哲信宣一正文一義嶋田井元野下方原水口野山岡井田高門山藤根田木藤野本久田橋井島辺見本保垣川田藤池田原林木木藤子村橋竹野分田木司木津多木井野久保坂菅木善北清川菅丸片坂御久寺中佐閑山鈴伊平根佐安高藤西池岩橋大稻西寺加菊和小小佐八後佐益川高大中国志鈴郡鈴浜本鎧閑  
寛利司亮人樹一宏美二郎弘武徹司治毅史一洋巖一生光衛成利一成修生繁雄孝憲久司朗充司彦二芳哲敬彦正博平喜昭卓文才美文明一内平二  
勝仁義英貢雅雅芳健勝啓宏正悠隆賢和一一和十崇良敏治靖皓吾宏顯一欣哲義元昭正知日久出宏英隆友謙修  
本部林瀬井副木藤塚海藤木原月田竹田田本見田條山橋田田原橋本田藤藤保山指木原場保堀木觜浦田部向沼野本野井瓶澤戸村木藤垣田  
坂江小廣薄川梅三佐中鳥佐藤菅嶋塩豊下和福岩北堀上北高木桑宮高桜澤遠遠三真江若拝市神赤唐鷹三池諷日小菅橋平河三森一木青佐板西  
教一勇郎範志泰彦一隆雄右匠正彰哉博之彥徹次郎夫司士友健良真良志生一雄勝祥光徑昭郎夫剛道二信彥勝進光斌至孝史世章市雄文紀  
泰進健慶篤伸義俊敬智慎征義晴俊俊悅武幸伯克浩敬千弘孝映健照博博寬憲清紀正功政篤直洋和聰秀寬弥和博宏  
川田山井本木浦野辺江川田井川田倉池島田原田藤澤村木野東部田鳥住橋根田村野澤川野川藤藤原田間松越谷成田訪車名口保川口  
松野西石岸栗黒三浅渡西小坂酒名多高菊中鎌柳吉堤佐唐中沢角荻安阿岡待吉高赤成河高三石矢中佐佐奥谷本佐生水深安葭諷六川山久中辻  
谷羽久  
武俊次二吉郎幸弘敏久志夫一章吾忠朗郎智進一彦一次輔一誠雄寛代功夫武亮輝司彦郎彦隆志充一智英人彦巖健幸子郎豊人彦研一則言廣也  
長勝誠征健次正利勝芳隆紀紘浩真哲瑛彰雅雄浩楨秀敏奈一彰有功竹一映正直公克成之甲欽克正健知真安順  
澤田村原辺崎納吹山藤崎藤林田山沢田場橋水井藤口野田林藤久本石西原田田中梨山上坂木岡山村芝立斐田藤入田葉部山林木瀬山司幡込  
吉上中石渡瀬安矢龜佐江佐中池丸半原馬石清玉佐矢水安小佐高橋大大杉藤清田高橋村宮鈴久澤中大正甲安伊坂桑千石谷小瀧加長神郡木中  
利一成一邦広勇二男敬一郎芝猛生重英充捷一雄彦敬卓衛雄彦介展二明智彰昭史偉啓博右郎夫雄彦夫一勝孝二樹雄一郎紀介雄正忍人紀博  
輝俊浩平敏俊昌出田日真雄敬岑和勝淑英繁健德則文俊義洋裕政將高協和佳忠克敏孝利冠樹直文裕嗣利大久美直芳正  
藤田田野島川塚井幡村井山橋藤岡島代沼山池澤永屋石田村川田原嶋郷草島林藤田花藤垣井藤藤辺井田川根木藤藤野田橋木田本  
佐前松小矢北松仁小上田星増大伊村辻田矢瀬鳥小平神守白種木北太篠中繩須江成長佐藤堀立武柴石佐斎渡松松井鳴佐佐齊秦富高玉坂垣  
久々

# 校 友 短 信

## 土木工学科

斎藤吉正 (2回卒、札幌市)

ご盛会を祈念します。 (H.16.8.23受)

鈴木洋二 (2回卒、原町市)

現在の大学の発展をテレビ、新聞等で見、驚いております。此の機会ですので、室内同伴で出席致しますので宜しくお願ひ致します。 (H.16.9.24受)

松本昌樹 (22回卒、札幌市)

母校を訪ねる事は大変意義のある事と思っております。今回どうしても休暇をとれず残念です。 (H.16.10.11受)

滝谷信二 (22回卒、深川市)

母校を卒業して30年が過ぎますか!? 早いようで短い感じがします。仕事の都合で欠席します。皆さんによろしくお伝え下さい。 (H.16.9.8受)

原 健二 (22回卒、長野市)

日本一の激戦区の長野県でがんばっております。

(H.16.8.30受)

金成健二 (32回卒、所沢市)

東京勤務のため、都合がつかず残念ですが欠席します。次回も連絡お願いします。 (H.16.9.15受)

青野 肇 (32回卒、新潟市)

事務局の方々、御苦労様です。24日、楽しみにしています。当日も大変御忙しいと思いますが宜しくお願ひします。 (H.16.9.16受)

岩田伸一 (32回卒、富山県中新川郡)

今、宮城県の長沼ダムの水門の基礎工事で卒業以来久し振りに東北で仕事をしています。 (H.16.9.29受)

長澤宏明 (32回卒、新潟市)

卒業後21年目のこの回を楽しみにしておりましたが、この日は2日間とも勤務日となっておりたいへん残念に思います。 (H.16.8.23受)

丸山康弘 (32回卒、高崎市)

「母校を訪ねる会」楽しみにしています。月日の過ぎるのは本当に早いものですね。 (H.16.10.6受)

## 建築学科

山本恒雄 (2回卒、山形市)

折角のチャンスですが全国会議で出張中です。いつも新幹線の車窓から母校発展の様子を見て喜んでおります。近くに居た理工学部を含めて同期生は故人となりました。遠くの人達は音信不通です。 (H.16.8.26受)

吉田 宏 (12回卒、札幌市)

10月25日、早朝から社長任務があり出席がかないません。母校のご発展と皆様のご健勝、ご活躍を心からお祈り申し上げます。10月23日、3年振りにキャンパスを訪ねます。 (H.16.10.5受)

丹治郁夫 (22回卒、宮城県黒川郡)

青森県に初めてとなる原子力発電所の建設に従事しています。本館建屋工事もまもなく竣工を迎える予定で、官庁検査などの準備のため欠席させて頂きます。母校のますますの御発展を下北の地より願っています。 (H.16.9.21受)

伊藤 彰 (22回卒、山形市)

山形県工科系校友会事務局をさせて頂いております。何かありましたら宜しくお願ひ致します。当日予定が入っており出席出来ません。御盛会でありますようお祈り致します。 (H.16.9.4受)

北川善啓 (22回卒、栗東市)

主人は今年1月11日に病氣で亡くなり、欠席させてもらいます。よろしくお願ひします。(令夫人より) (H.16.9.2受)

北川様の御逝去を衷心より悼みます 合掌 (工学部校友会)

藤木正行 (22回卒、高崎市)

剣道部に在籍しておりましたので同OB会に数度出席し郡山にも卒業後何回か訪れました。町並みもすっかり変わってしまいその度に驚いています。 (H.16.8.30受)

西島衛治 (22回卒、熊本市)

現在、九州看護福祉大学教授。パリアフリーの研究や障害児の教育空間の研究を続けています。 (H.16.8.26受)

荒木田一男 (22回卒、盛岡市)

現在、岩手県磐井病院・南光病院の新築工事で設計監理をしています。 (H.16.9.28受)

二見昭敏 (22回卒、神奈川県足柄下郡)

平成16年2月4日、永眠致しました。10年前に夫と母校を訪ね、懐かしく過ごした事を思い出します。友と過ごした日々を故人も身に思い、さだめし感謝致していました。皆様、ご自愛の上活動下さいますようお祈り申し上げます。(令夫人より) (H.16.8.30受)

二見様のご冥福を心よりお祈り申し上げます 合掌

(工学部校友会)

林 辰夫 (22回卒、熊谷市)

埼玉国体準備のため、誠に残念ですが欠席させて頂きます。 (H.16.8.26受)

今野 融 (32回卒、静岡市)

小栗先生は現在、どのようにお過ごしでしょうか?私は転勤があり、今は、静岡にいます。 (H.16.10.5受)

## 機械工学科

池田 修 (22回卒、桐生市)

主人は一昨年 (H.14.10.6)、病気のため亡くなりました。(令夫人より) (H.16.8.30受)

池田さまのご冥福を心よりお祈り申し上げます 合掌

(工学部校友会)

海野和雄 (22回卒、静岡市)

現在はエンジニアリング会社に勤務しております。30年(53歳)たった今も仕事に追われる毎日です。そんな中、学生時代大変お世話になりました恩師、又旧友との再会は楽しめなりません。 (H.16.9.27受)

江古憲昭 (22回卒、北九州市)

会社の創立記念日と重なり、勤続30年の表彰となるため出席出来ません。皆様へ宜しくお伝え下さい。 (H.16.8.26受)

田村忠悦 (22回卒、秋田県山本郡)

はちもり観光市の組合長を拝命しており、当日、イベント「大漁祭り」を計画しております。よって、日程調整ができませんので出席できません。誠に残念です。 (H.16.9.29受)

大和田健一 (22回卒、いわき市)

息子が世話をになっております。母校の変貌には驚いています。 (H.16.9.13受)

根本文彦 (32回卒、帯広市)

陸上自衛隊で兵站という部門を担当しています。日大で学びました数々のことは大変役立っています。(S.I.単位とか・・・) (H.16.10.8受)

八重田 淳 (32回卒、三鷹市)

小野沢先生、お久しう振りです。お逢い出来ますことを楽しみしております。 (H.16.9.27受)

## 電気工学科

関根昭一 (2回卒、郡山市)

現在元気で頑張っています。「母校を訪ねる会」ご盛会を祈ります。 (H.16.9.21受)



日本大学工学部校友会員各位

平成17年3月1日

校友会会长 加藤木研

## 平成17年度 通常総会通知

本会会則第13条により、日本大学工学部校友会平成17年度通常総会を下記の通り開催いたします。皆様には年度始めにあたりご多忙とは存じますが、先輩・後輩お互いにお誘い合わせの上、多数ご出席くださいますよう、ご通知申し上げます。

記

1. 日 時／平成17年4月23日(土) 14時より
2. 場 所／日本大学工学部 50周年記念館(愛称:ハットNE)
3. 議 題／(1)平成16年度会務報告および決算報告  
(2)平成17年度事業計画および予算審議  
(3)役員の改選  
(4)その他
4. 懇親会／総会終了後、同所2階カフェテリアにおいて大学関係者を迎えて懇親会を開催。以上

## 第25回 母校を訪ねる会

日 時／平成17年10月23日(日)

場 所／日本大学工学部 50周年記念館  
(ハットNE)を予定

対 象／第3回卒業生(昭和30年3月卒業)  
第13回卒業生(昭和40年3月卒業)  
第23回卒業生(昭和50年3月卒業)  
第33回卒業生(昭和60年3月卒業)

今回は左記の卒業生が母校訪問の主たる対象となります。対象年度に関わらず、是非とも多数ご来校ください。大きく発展・成長した母校をご覧いただき、恩師や級友との再会に懐かしい一時をお過ごしください。この日は第55回北桜祭開催中です。



## 校友会報 第68号

発 行 者 日本大学工学部校友会  
福島県郡山市田村町徳定字中河原1  
郵便番号 963-1165  
電話番号 024-944-1327  
FAX番号 024-944-1327  
E-mail:info@kouyu.ce.nihon-u.ac.jp

発 行 部 数 43,500部  
発 行 日 平成17年3月1日  
発行代表者 校友会長 加藤木研  
編集責任者 編集委員長 長澤幸二